

ウラーンフー——書き終えて、好きになった男
楊海英

拙著『中国とモンゴルのはざま——ウラーンフーの実らなかつた民族自決の夢』を岩波書店が二〇一三年から発刊しはじめた「岩波現代全書」の一つに加えていただき、このほど書店に並んだ。ウラーンフー（一九〇六—八八）という国際共産主義者の波乱万丈の生涯の一部を描いたものである。ナシヨナリズムを軸に彼の思想と実践を「自決期」と「自治期」、「抵抗期」と「破滅期」という四段階に分けて描写した。ウラーンフーは中国に対して民族の自決権の行使を求め、中華民主連邦を創りたかったが、与えられたのは自治だった。彼は本物の自治を実現しようとして、中国人すなわち漢族と闘い、抵抗し、そして肅清され

て破滅した、という流れである。国際共産主義者兼モンゴル人ナシヨナリストのウラーンフーの思想と、毛沢東ら中国人社会主義者との相克に重点を置いたので、面白いエピソードを多数、割愛してしまった。ここでそのうちのいくつかを紹介したい。

留学先での空白

ウラーンフーは南モンゴルの西部、中国人農民の侵略を早くから受けていた地域の出身だ。中国による植民地支配を打破しようとして、モンゴル人の民族主義の政党、内モンゴル人民革命党に一九二五年秋に入った。入党した直後に、同党から派遣されてソ連に留学した。弱冠、一九歳の時だった。

彼はモスクワに四年間滞在中、ロシア語が抜群にうまくなっていた。私は彼の人生のなかのモスクワ期を「求道」時代と表現したが、実態はまったく把握できていない。彼に関する膨大な資料群のなかで、モスクワ滞在期については、中国では何ひとつ公表されていないからだ。これは、資料の公開を渋る中国政府に原因があるというよりも、そもそも資料らしい資料がないと予想している。すべて、モスクワのコミンテルン関連のアーカイブに秘蔵されているだろう。そして、もう一つの資料宝庫はウラーンバートルだ。一九二四年に成立したばかりのモンゴル人民共和国はコミンテルンとともに、南モンゴルに住む同胞たちを解放しようという目標を掲げて、内モンゴル人民革命党の創立に関わっていた。青年ウラーンフーはソ連に本部をおくコミンテルンとモンゴル人民共和国主導の下で、

モンゴル人を中国の抑圧から解放する運動に身を投じていた。当然、彼の青年期の資料も中国には残っていないのである。

ウラーンフーは一九二九年にコミンテルンの「世界革命」の指令を帯びて南モンゴルに帰郷した。その際にロシア語の『資本論』を一冊、大切に持っていた。ときどき、内モンゴル自治区の首府フフホト市にある「ウラーンフー記念館」で展示されるが、ぼろぼろになってしまったのは、彼がマルクスの大著を片時も身から離さずに読みこんでいたためだという。中国において、諸民族は「自治」ではなく、自決権を求めるべきだ、と奮闘した彼の思想的な源泉は、ロシア語で書かれた共産主義の典籍内にあったのである。

結婚生活

「弱冠、一九歳」とソ連留学に旅立ったウラーンフーを私はこの

ように表現した。弱冠でも、彼はすでに三歳の女の子と、一歳の男の子の父親になっていた。中国の資料は彼がいつ結婚したかなどの私生活に関する情報を一切、伝えていない。計算してみると、ウラーンフーは遅くとも一五歳の時に結婚しているはずだ。妻の名は雲亭で、同郷のモンゴル人だった。長女の名は雲曙碧で、長男はブヘという。ブヘとは「力士」との意で、モンゴルらしい名前だ。モスクワから帰郷したウラーンフーは、中華民国の軍閥、傅作義と一〇年間も親しく付き合ってから、一九三九年にようやく共産党の割拠地、延安に入る。遅々として共産党陣営に行かなかつたのも、モスクワの指示があつたからであろう。この時期、スターリンはまだ田舎出身の毛沢東よりも、蒋介石の国民政府を支援していたからである。

ウラーンフーは一九四五年に日

本が大陸から撤退するまで延安で暮らした。この間に、彼は雲麗文という美女と同棲するようになる。雲麗文は彼の長女、雲曙碧と同じ年で、一六歳年下だった。ウラーンフーが延安に行く際に、同郷のモンゴル人青少年たちを数十人も連れていた。このなかに雲麗文もいた。少女雲麗文と雲曙碧は、親しい間柄だった。

親友と恋に落ちた父親のウラーンフーを娘の雲曙碧はどのように見ていたのだろうか。この時期の延安では糟糠の妻を捨てて、知的で若い都会育ちの女性と結婚するブームが起こっていた。先頭に立っていたのはほかでもない毛沢東だ。苦難をともにしてきた妻の一人、賀子珍と別れて、上海で風流の名を轟かせていた女優江青と結婚した艶聞は広く知られている。モンゴル人のウラーンフーもこのブームに乗ったかどうかは不明だが、性におおらかなモンゴル

人の観念もあつたかもしれない。ウラーンフーは結局、雲亭と離婚したか否か、雲麗文と正式に結婚の手續きを取ったかどうか、謎のままである。ただ、彼は最後まで、二人の女性の面倒をよくみていたのである。

モンゴル語の名前

ウラーンフーがウラーンフーになる前に、雲澤と呼ばれていた。いつ、どこで、何のためにウラーンフーと名乗るようになったかも、正式の記録はまだ公表されていない。今日のモンゴル人たちはだいたい、一九四七年五月一日に、内モンゴル自治政府が旧満洲国の興安総省の省都王爺廟で成立した際に、「雲澤がウラーンフーに生まれ変わった」と見ている。ウラーンフーとは「赤い息子」との意だ。彼の肝いりで創設された内モンゴル自治政府の首都の名もこの時期に王爺廟から「ウラーン

ホト」に改名した。こちらは「赤い都」との意だ。同じ時期のソ連圏とその衛星国にはすでにウラーンバートル（赤い英雄）がモンゴル人民共和国、ウラーンウッド（赤い扉）がブリヤート共和国、キズル（赤い町）がトゥバ自治共和国、などの国々の首都の名にそれぞれ冠されていたのである。ウラーンフーは、内モンゴル自治政府をきたるべき時期に出現するだろうと彼が夢想していた「中華民主連邦」内の一共和国にしようと努力していたので、自分にも社会主義を具現した名を付けたのではないか。

別の説もある。レーニンの姓、ウリヤーンノフから取ったという。レーニンもその母親はモンゴル系だったために、ウリヤーンノフの姓もモンゴル語の「ウリヤーン」（柳の意）に由来するといわれている。となると、赤い「ウラーン」と共産主義の元祖ウリヤーンノフを

合体させたほど格好いい名前はない、と本人がそう考えたかもしれない。

ウラーンフーの改名は成功した。モンゴル人に対しては、自分は真正銘の共産主義者だといえ、中国人たちに対しては、自らはマイノリティを代表する国際的な革命家だと宣言できたのである。中国人たちはもちろん、発音しにくい「烏蘭夫^{ウラーンフー}」よりも、中華風の雲澤を好んでいた。

燃えなかつた「余燼」

一九六六年五月に失脚させられたウラーンフーは文化大革命中に南国の湖南省長沙市近辺に幽閉されていたと伝えられている。その十年間を彼が誰と、どういう風に過ごしたのかも、まったくわからない。ウラーンフーの政敵である鄧小平も南国に流されている間はあるが、モンゴル人政治家の流

刑生活の詳細はまだ明るみに出ていない。

一九七七年あたりから少しずつ復活し、最終的には国家副主席のポストを当てられても、南モンゴルに帰郷することだけは許されなかった。私は復活後の彼の活動期を「余燼」と表現したが、モンゴル政治家の思想と活動の炎がモンゴルの草原に燃え移ることに對し、中国人たちは最後まで警戒を緩めなかったのである。だから、彼はどんなに「高位」に上りつめても、モンゴル人たちとともにいるのを中国政府は絶対に許さなかったのである。

以上のように、書かなくてカットしてしまったのは「美味しい話」ばかりである。岩波書店編集部副部長の馬場公彦さんはこんな私を見て、次のような「編集部からのメッセージ」を発してくれた。

本書にはモンゴル人である楊さ

んの思い入れや想像がウーランフーという人物造形の重要な要素となっている。とはいえ、その基底には、膨大な一次資料がある。『内モンゴル自治区の文化大革命——モンゴル人ジェノサイドに関する資料』（風響社刊）というA4判で一冊が1000頁になんなんとするほどの資料集をすでに五冊刊行し、い

ずれ一〇冊まで刊行する予定である。各冊の解説だけでもゆうに一〇〇枚はある。徒手空拳で広大な中国の大地からこれらの資料を収集し、体系的な資料集をまとめる才覚と執念は、並大抵のものではない。ウーランフーは、モンゴル人大量虐殺という凄惨な悲劇の原因と結末を一身で背負わされるような役回りを演じさせられた。だが、誰よりもモンゴルを愛し、民族主義者として偉大なモンゴル人の民族英雄であるチンギス・ハー

ンの足跡を追い求め、「第二のチンギス・ハーン」になろうとした。本書から、自伝もまともった証言も残さなかったウーランフーの内面の真実の声を聞く思いがする。

(<http://www.iwanami.co.jp/moreinfo/0291160/top.html>)

馬場公彦さんに触発された私はふと思った。私もほとんどのモンゴル人たちと同じように、実はウーランフーが大好きだったのだ。

彼が生きていたころは、「あいつは中国政府と中国人たちの傀儡だ」と見ていた。彼が肅清されてはじめて、ウーランフーがモンゴル人のために獲得できていた「部分的な自治権」はいかに大きかったかを実感した。というのも、今、その限られた自治権すら中国政府と中国人たちにほぼ剥奪されつくしたからである。